

審査員特別賞

世界の現実に向き合った私の使命

United World College Dilijan 2年

根岸 優花

長野県の田舎町で育った私は、昨年高校二年時に海外留学を決め、ひとり日本を旅立った。そして80以上の国と地域から選ばれ集まった仲間と出会い、今まで全く知らなかった世界を目の当たりにすることになった。

自己紹介では、名前の次に日本出身だということを伝える。毎日の授業では、私個人の意見だけではなく、日本人として、日本という国の立場を問われる。日本と近い国の出身の友達はもちろん、日本とほとんどつながりのない国の出身の友達からも、文化や生活だけではなく、政治、外交的立場や経済まで多岐にわたり日本という国について尋ねられる。これらの一つ一つの経験を通して、自分の日本人としてのアイデンティティを強く意識するようになった。それまで私にとって日本人であることは当たり前で、特別意識するようなことでもなかったのだが、その当然が、日本を出て初めて崩れ去ると同時に、日本人であることの誇りを感じるようになった。

その中、私は一か月の冬休みを利用してシリア人の親友が住むヨルダンを訪れることになった。彼女から教えてもらう中東、アラブの文化はとても新しくロマンティックで、私を骨の髄まで魅了していたのだ。期待を胸に彼女と空港のチェックインカウンターで搭乗の手続きを進めているときに人生を180度変えるような出来事が起こった。彼女がシリアのパスポートでヨルダンに入国するために必要であるビザを持っていなかったために、搭乗を拒否されたのだ。だが、彼女の母がヨルダン人で、彼女もヨルダンに住むため法的にビザなしの入国が認められているはずだった。居合わせた学校の先生も加わって一時間を超える交渉をしたが、結局認められることはなかった。「ただ家に帰りたいだけなのに」と彼女は涙を流した。「この学校に入ってやっと、シリア人であることに誇りを持てるようになったのに、一步出たらまた自分の運命を呪ってしまう」とこぼした彼女の言葉は今も脳裏に焼き付いている。思えば私は、日本人であることを後悔した瞬間など一瞬たりともなかった。むしろ確固とした誇りを抱いているほどだ。彼女がいかに母国を愛しているかは身に染みるほど知っている。それだけに彼女の言葉は私の心に重くのしかかった。世界の不平等と理不尽さを目の前に付き付けられた。私の中に行き所のない強い怒りと深い悲しみがこみあげてきた。同時に、どうにかしてこの不平等をなくそうと心に固く誓った。

今、私に何ができるのだろうか。それは、現実に向き合うことの大切さを伝えることだ。メディアの報道を通してシリアでの紛争は知っていても、その外でシリア人がどのように苦しんでいるかを知る人は少ないだろう。私はそれを知って初めて、「戦争はよくない」と綺麗事のように掲げながら眺めていたシリアの紛争が、遠い国の出来事なんかではなくて、もっと身近な問題なのだと認識した。私はその現実を第二次世界大戦以来平和への道を進んできて戦争さえ遠い出来事に感じられるようになった日本に生きる者だからこそ、知るべきだと思う。まだ鶴の一声でシリアの紛争もテロリズムも終わらせる力がない私の使命はこの現実をできるだけ多くの人に伝えて、問題を身近なものとして意識をしてもらうことだ。さらに、私が行動モデルを示すのではなく、この世界の現実を

知った一人ひとりがそれぞれできることを考えて、世界を変える行動を始めるきっかけ作りをした
い。

私は帰国してまず初めに、中学生の頃から在籍していたリーダーシップ研修を目的とする団体で、
同じ中学、高校生の若者達にこの経験を話す機会をいただいた。「私は医療ボランティアをしたい」
「報道で見えない声を伝えたい」と、一人ひとりが何をできるか考えるきっかけを作ることができ
た。ここから微力ながら、世界の不平等や理不尽をなくし、全地球市民が自分の国籍をどんなとき
も心から誇りと思える世界に変えていきたい。